

## キューバ共産党第一回全国会議開催される

キューバ共産党第一回全国会議が、1月28日、29日の二日間、ハバナの国際会議場で、80万人余の党員を代表した806名の代議員が参加して開催されました。会議の開会演説は、



ホセ・ラモン・マチャド・ベントゥーラ党第二書記が行い、4つの分科会で討論が行われました。29日には分科会の議事録の発表と承認、「党の目的と活動についての決議」が提案され、承認されました。最後にラウル・カストロ党第一書記が閉会演説を行いました。この全国会議は、昨年4月に開催されたキューバ共産党第6回大会合意に基づいて開催されたものです。

合意では、「第6回大会は、全国会議を招集し、党活動の方法とあり方、党幹部の構成と幹部政策を刷新するとともに、規約を修正するために基本的な概念と理念を評価し、設定する権限を与える。全国会議に、第6回大会で承認された人数に加えて新中央委員の選出し、中央委員の解任あるいは定員数を変更する権限を与える」と決定されていました。

また、同大会の閉会演説で、ラウル・カストロ第一書記は、「大会は、全国会議に、党活動の方法、有り方、幹部の構成、幹部政策、中央委員会の拡大と改選を委託した」と述べていました。特に、大会では、党中央委員会書記局が改選されず、2012年1月の全国会議で改選する予定だとされました。

党中央は、昨年10月14日、全国会議の討論資料として、「キューバ共産党第1回全国会議、基本文書案」を発表し、全国の党員に討議を呼びかけました。同文書は、序文につづいて4章97項目からなり、その中で、重要な点は、次の項目でした。

- 党は、革命の正当な結実であり、同時に前衛であり、国民とともに革命の歴史的継続を保障するものである。
- 民主集中制、集団指導、個人的責任の原則を党の組織と構造の支柱とする。
- キューバ共産党は、マルクス主義、レーニン主義、マルティの党であり、キューバ国民の唯一の党である。党の主要な使命は、すべての同胞を団結させ、社会主義を建設するという至高の目的に参加させる、革命の成果を維持し、キューバと全人類にとっての正当な夢の実現のためにたたかうことである。
- 党の中ではすべてのものが批判する権利をもち、だれも批判を逃れることはできず、実際は自己を弁明する自己批判を容認するという慣習をなくすという原則のもとで、批判と自己批判の実践を推進する。
- 党大会を開催するための党の規約に定められた定期性を維持する。戦争、自然大災害、その他の特別な事情から大会の開催を延期するには、中央委員会総会の承認を得ない

ればならず、また党員に知らせなければならない。

- 中央委員会総会を、少なくとも年2回開催する。
- 入党は、自発性、模範性、常に大衆と相談し、国民の認知の保障として資質を優先させることを原則とする。
- 政府及び党幹部は、5年間2期連続を限度とする。

基本文書の討議は、党の内部問題であるという性格から、今回は党外では行われず、10月から11月にかけて政治局、書記局、党支部、キューバ青年共産同盟(UJC)で行われ、12月21日に開催された第3回中央委員会総会で総括されました。そして本年1月文書の修正、新たな追加条項の討議が、各県党委員会で開催された全国会議出席予定代議員によって議論されました。こうした各級の組織での段階を踏んだ討議は、当然あるべきことですが、これまでのキューバ共産党の大会にはなかったことで、ラウル路線の特徴とっていいのでしょうか。



**文書の討議**では、100万余の意見が寄せられ、97項目のうち78項目が修正され、新たに5項目が追加されました。決議された決定文書、「キューバ共産党活動諸目標」は、2月11日公表され、100項目に整理されました。

**大会代議員の構成**は、男性が57.3%、女性が42.7%、白人が62.5%、黒人・混血は37.5%でした。第6回大会で選出された中央委員会委員115名のうち、女性が48名、41.7%黒人と混血が31.3%であったことと比較して、いずれも若干改善されつつあります。

全国会議についての一般の市民の意見は、少なからずの人々が、「党の全国会議については、あまり報道されていないし、会議に期待もしていない。党は、もっと国民の現実の必要性を知ってほしい。会議は問題を解決しないのではないか」というものでした。

すでに、1月12日にラウル第一書記は、新聞記者団に、「あまり幻想をもたないように。党の組織問題を集中して討議するので、それを知れば、関心を失うだろう」と述べていました。また、開会あいさつで、マチャド・ベントゥーラ第一書記は、「革命を引き続き前進させるため、必要ないろいろな改革を行うが、それは、いささかでも敵に譲歩して行うものではない」と述べ、期待された、一層の経済改革の討議は行われなことが予測されました。この背景には、昨年度北アフリカのいくつかの国々で国内の反政府勢力に外国から資金・武器が供与され、自主的な解決を複



雑にしているとキューバ政府はみていること、全国会議の直前の1月19日、「反体制派」のウイルマン・ビジャールがハンストの後、看護のために移送された病院で死亡する事件があり、EU諸国などから非難があったこと、1月中旬の米国大統領選挙戦で米共和党大統領候補が、いずれもフィデルを酷評するなど、国際的なキューバ非難が強まっていたことがあります。



分科会は、(1) 党活動の機能、方法、方式(206人参加)、(2) 政治的・思想的活動(219人参加)、(3) 幹部政策 (177人参加)、(4) 党とUJC及び大衆組織との関係 (200人が参加)に分かれて討議され、議事録を、それぞれ(1) ビクトル・ガウテ・ロペス中央委員会書記局員、(2) ロサ・ペレス・モントヤ中央委員、(3) アベラルド・アルバレス・ヒル中央委員会書記局員、(4) オルガ・リディア・タ

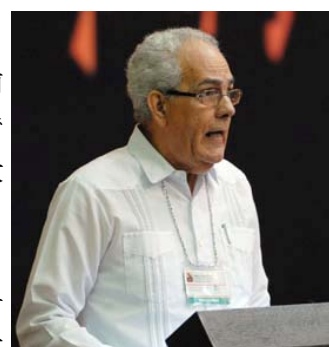
ピア中央委員会書記局員が報告しました。長年人事を担当してきたアルバレス・ヒル書記局員を除き、すべて50歳代の若手幹部です。



決議では、「民主集中制、集団指導の原則の順守、第6回大会で決定された経済モデルの刷新の実行、幹部政策として女性、黒人、青年幹部の登用、腐敗、違法行為、無規律に党が対処すること、政治局に党の構成、規則の改正を委託すること、第6回大会で決められた115名の中央委員の20%までを次期大会までに中央委員会で互選して改選すること」などが決められました。会議では、結局人事面には触れられず、党大会で決められた書記局の改選も、行われませんでした。

閉会演説で、ラウル第一書記は、次の点を強調しました。

- 「キューバ共産党は、社会と国家の最高指導勢力である」という規定は、革命の合法的な成果であり、党は組織された前衛であり、国民とともに革命の歴史的継続を保障するものである。この概念は、憲法第5条に示されているが、決して放棄することはない。
- 一党制の原則を放棄することは、帝国主義の党を合法化するに等しく、キューバ国民の団結という戦略的武器を犠牲にすることである。団結あってこそ、独立と社会正義の実現が可能であったのである。
- マルティは、独立闘争を組織するために、唯一の政党、キューバ革命党を創設したのである。



- いわゆる代表制民主主義の有効性と有用性を議論するつもりはない。そこでは、各国の経済的金融的覇権を持っている階級に政治権力が集中する一方、大多数は何も持たず、表明せず、残酷に抑圧されていることが、ずっと行われてきたことは、よく知られていることである。
- 一党制というマルティの考えにもとづく選択は、われわれが主体的に選択し、国民が参加し、支持しているものであり、われわれの社会では最大限に民主主義を推進するものである。党の中では、各段階で最も広範で真摯な意見の交換が行われる。
- たとえ上司がいおうと、正しいと思えば、論理的に、適切な場所で、適切な時に、正しい形で、つまり廊下ではなく会議において、面と向かって目を見つめて意見の違いを述べ、議論することが重要である。
- 50年にわたって犯してきた、また今後犯すかかもしれないいろいろな誤りを一掃しなければ、キューバ革命と社会主義は、倒壊することになるだろう。
- 誤りのない革命は、これまで存在しなかったし、これからも存在しないであろう。それは、完璧ではない人間と人々が行う事業であるからである。
- 党の指令が、ざるの水とならないように、政治局は、この会議で採択された「党活動の目的」の実行を中央委員会総会が、一年に2度検討するように決定した。これは、党県委員会、党基礎行政区委員会でも同じことである。われわれは、効果的に管理されなければ、実行しないし、表面的にしか実行しないことを経験から学んだ。
- マルティの遺産とマルクス・レーニン主義の教義は、われわれの革命の過程の主要な思想的基礎である。
- 第37項にあるように、キューバ国家を維持し、経済的社会的成果を維持するために、祖国、革命、社会主義は不可分に結びついている。
- 幹部政策では、思いつき、先見性・組織性の不足から、党、国家、政府において複雑な指導の活動を行うのに十分に準備された、経験豊かな成熟した後継者たちが未だにいない。このことは、あせらず、しかし休まず、大会の合意を実行しなければならない。
- 主要な政治的・国家的任期は2期5年を限度することを憲法及び付属の法律に導入しなければならない。これは順次、憲法の改正を待つことなく始めなければならない。憲法の改正は、国民投票にかけることなく、国会において行う。党の規約やその他の規則も改正しなければならない。
- 党の指導部が腐敗した卑怯な人物の手に落ちるならば、敵が一発も打たずして、革命は存在しなくなるであろう。
- 現在の段階では、汚職は、革命の主要な敵のひとつであり、米国やその同盟国の干渉による多くの破壊計画よりもはるかに害がある。
- 腐敗は、まずブレーキをかけ、つぎに別に騒ぎ立てることなく一掃する。法律の枠の中で、腐敗の現象と妥協せずにたたかう。



- 汚職は、しばしば党员が行っているが、第三回中央委員会総会で、汚職を犯した党员は管理責任と刑罰を逃れることなく党から除名する。これまでは、こうしたケースでは、党からの除名は例外的であった。
- 党は、国と政府を指導し、それらの機能と実行を管理する能力をもたなければならないが、どんなことがあってもこれらにとって代わってはならない。管理を通じて指導するのである。
- 党は、指令主義をはっきりと終わらさなければならない。党の力は精神的なものであり、法律ではない。
- 党の管理は、同時並行であり、介入することではない。
- 党は、経済計画及び予算が正しく作成されるように管理し、政府と議会により承認されたあと、厳格に実行されるべきものである。この概念は、第一回党大会の時から、大変はっきりしていたが、その後それを忘れ、引き出しにしまってしまった。そのためほぼ半世紀たつて 40 年前に作った文書の埃を払わなければならないのである。したがて、われわれは、それぞれが自分に属することを行い、他人のことを支援はしても干渉しないという制度性を重視するのである。

キューバにおける一党制の問題については、筆者は、すでに論じたことがあります。簡単にいえば、各国とも民主主義のあり方には、歴史的に形成された固有の事情がありますが、複数政党制、党と国家、政府の関係については、普遍的な民主主義の根幹に関わる問題です。マルティが組織したキューバ革命党は、参加政党が組織を維持したままの統一戦線党でしたし、1959年の革命勝利後、それまでの政党が雲散霧消し、1965年に7・26運動、人民社会党、革命幹部団が合流してキューバ共産党を結成して、結果的に一党しか残らなかったのは歴史的経過としても、法律で他の政党の存在を禁止することは別な問題です。



現代の革命、社会主義をめざす過渡期の革命は、少数者革命では到底実現できず、多数者革命でなければ実現できません。そしてその中核になるのが革命政党であるとすれば、その党は、10%程度の国民が参加するエリート(前衛)の党ではなくて、多くの国民が参加する強大な政党となるでしょう。キューバ共産党の入党手続きは、職場総会という非党员を含めた大衆会議の承認が必要なこととなっており、党の綱領(現在なし)と規約を認めた人が参加できるという普遍的なものとはなっていません。狭い概念の党であるとともに、その党の存在しか認められないというのは、資本主義から社会主義をめざす過渡期社会の政党の在り方としては、疑問を感じさせるものです。

こうした狭い概念は、米国からの執ような干渉政策があり、それに多くの国内の反対勢力

が呼応し支援を受けているとしても、そうでない人々の政治的結集もすべてアメリカ帝国主義の党とひとくくりにするのは、あまりに短絡的ではないでしょうか。

党が、国と社会の最高指導勢力であるという規定を憲法に挿入することになったのは、ソ連の1936年憲法に始まり、スターリン自身の指導のもとに挿入されたといわれています（大江泰一郎『ロシア・社会主義・法文化』、日本評論社、1992年）。党の威信、あるいは信頼は、党の実際の政策、行動から国民が決めるものであり、憲法や法律で決めるものではないことは明白なことです。一党制についても、「一党制が社会主義の政治制度の原則だなどということは、マルクス、エンゲルスはもちろん、ソビエト政権の最初の指導者となったレーニンも、かつて主張したことのない問題です」（不破哲三『科学的社会主義における民主主義の探求』、新日本出版社、1990年）。

この点に関しては、全国会議前に、キューバの知識人、社会学者のアウレリオ・アロンソが、「党は、引き続き国の上に存在することがあってはならない。一部の党員は、党員資格を地位の向上のために取得している。彼らは、国民に奉仕するよりも、自分の利益を満足させるために党員となろうとする。近年、汚職で逮捕されたものの大多数は、党員であったというのは偶然ではない」と警告していました。

会議の結果は、「経済改革を一層すすめるというものにはならなかった。誤りがなぜ正されなかったかという分析がなかった」というものまで、様々な批判的な意見が少なからずあります。

長年にわたり放置されてきたキューバ経済・社会の歪みは、大変複雑なものがあります。それらをようやく、ラウル指導部は、党大会を行い、経済・社会路線を策定し、克服しようとしているところです。改革は、ラウル第一書記がいうように、構造改革となり、ここ数年は経済改革で精一杯で、政治的な混乱がない中で改革の成果を挙げたい、政治改革はその後で、というのが、ラウル指導部の偽らざる心情でしょうか。

(2012年2月13日 新藤通弘)